

“境界のなさから生まれる漠然とした不安”

教育委員会委員 橋本 和明

今の子ども達にしばしば思うことは、彼らの中になんとも言いようのない漠然とした不安があることです。“漠然とした”という表現を使ったのは、進学や友人関係、性の問題など何か具体的な悩みがあるわけでもないのに、心がどこかザワザワして落ち着かなかつたり、得体の知れないものが押し寄せてくるような不安感を抱いていることが多いからです。

漠然とした不安の背景には、「現実と非現実の境界のなさ」、「被害と加害の境界のなさ」、「生と死の境界のなさ」といった境界のなさが隠れているように思えます。

「現実と非現実の境界のなさ」は、ゲームをしている感覚で実際に人に暴力を振るってしまうという例などもあります。ゲームをしている時の方が現実を生きているよりもリアリティを感じてしまい、逆に言えば、現実世界はどこか手応えの得にくいものに映ってしまいがちです。

「被害と加害の境界のなさ」は、いつ自分が被害者の立場、あるいは加害者の立場に置かれるかが定まっていないので、不安定になってしまうことです。いじめを例に挙げると、いじめたり、いじめられたりした経験は実際にはないものの、突然に「あなたの今の言い方はいじめだよ」と指摘されたり、逆に、いつ友達から仲間外れにされてしまうのかと思いつきあっているようなことを連想されるといいかもしれません。要するに、何か明確な理由や原因がないにもかかわらず、自分が突如として被害者の立場、あるいは加害者の立場に追いやられてしまうという境界のなさが不安を起こさせてしまうのです。

「生と死の境界のなさ」は、ちょっとした困難に遭遇しただけでもすぐに自殺サイトにアクセスしたり、時には安易にリストカットをしたりと、死の方向に舵を切ってしまうことです。また、死んだとしても、ゲームでリセットをするかのように生き返ると本気で思っている子ども達も少なくないようです。本来なら生と死との境にはどこか一線が引かれ、「あの世とこの世」、「彼岸(ひがん)と此岸(しばん)」のように明確に分かれているはずなのですが、そこに境界がないわけです。

境界のなさが漠然とした不安を喚起させるのですが、周囲の大人がまずしなければならぬことは、そのような子ども達を丸抱えで受け止めてあげることです。子ども達は受け止められているという安心感から次のステップに成長していけるのです。